

すでに出版したテーマごとの史料以外に、量・種類ともに膨大な「センター」の収蔵品については、特色が鮮明で、比較的系統だったテーマごとの檔案整理をすでに開始しており、順次開放して、利用可能としている。テーマごとの史料はおおよそ5つに分類される。末端単位と郷村の檔案、毛沢東時代の各種政治運動に関する檔案、公安関係資料、内部資料、個人資料である。

民間史料の発掘・整理・運用は、中国現代史研究の人文志向〔人文的なテーマへの関心〕を増大させた。

「中華人民共和国檔案法」の檔案についての定義に従えば、民間史料は民間檔案とも呼べ、「檔案内」の資料に分類すべきである。しかし一般的な意味での公的な檔案と大きく異なるのは、民間史料のうち最も量が多いのが社会の底層のパノラマ式の実録であり、ナマの、真に迫った、生き生きとしたものだという点である。内容のみならず、表現形式の面でも、公的な檔案の及ぶところではない。

民間史料の「内外兼ね備えた」特徴は、末端単位の檔案に最も明確に表れている。これらの「小人物」の運命を握る檔案の中から、上層の公的な記録の外にある底層社会の政治的状况を読み取ることができる。

個人の所蔵する工作ノート・日記・手紙などの資料は「センター」の民間史料の中でも注目を集めている。こうした貴重な「自家製の歴史」を心をこめて保存してきた檔案の主には、中国共産党の著名な高級幹部だけでなく、末端の「木っ端役人」も大勢おり、さらに多いのは名もない一般庶民である。

個人に関する貴重な歴史資料は現代中国史の解説に新たな道を提供する。「大から小へ」、ミクロな社会や個人の歴史の「真実」に接近すること、そこには「個性化」と「現場感覚」あるいは「臨場感」が含まれる。マクロな歴史的な巨大な変化を個々人の人生の物語に読み替え、複雑で変化に富む人生模様が「小社会」の中で展開されるさまを通じて、はじめて大きな歴史が、単なる国家の全体史、全体主義・革命・近代化といった中国現代史の解釈枠組にとどまらない、そして日々力が衰えることない、新鮮な価値と意義を現わすものとなるのである。

## 日記と中国近代史研究——『蒋介石日記』を例とした検討

呂 芳上（台湾中央研究院兼任研究員・国史館前館長）

中国近代史学界においては、近年個人の日記を出版し、日記を歴史研究の素材として利用する手法が広まりつつある。最も顕著な事例の一つが『蒋介石日記』（1917-1972）の公開と利用であり、間違いなく民国史研究に新たな潮流をもたらした。

『蒋介石日記』を素材とした近代史研究には、いくつか注意すべき点がある。

一、日記は確かに歴史の細部の理解と認識の助けとなる。『陳誠日記』『陳克文日記』を利用することで、第二次大戦期の孔〔祥熙〕一族の行動に議論すべき点がないわけではなかったことが見て取れるが、『蔣日記』を見



るとやはり類似した批判がある。国軍の軍紀の乱れについて、その原因の一つは軍人が商業に従事する悪習にあり、これは蒋介石が軍人は商売をしてはならないと繰り返し訓戒した理由である。1948・1949年の国民政府〔ママ〕の危機について論じれば、『胡宗南日記』と『蒋介石日記』の比較を通じて、両者の重慶と成都、西昌の防衛問題に対する主張の落差を見て取ることができる。蒋介石の威厳と個性のため、周囲に直接諫言できる人物は少なかった。楊永泰、張治中、熊式輝はそれができた三人である。主に『熊式輝日記』に依拠した『海桑集』は、蔣には「一つの権限を二人に持たせる」「他人に牽制させる」「越権指揮」という悪癖があったことを指摘しており、これは蔣が1949年前後の内外の相継ぐ非常事態に際し失敗した原因の一つだった可

能性が、蔣の日記から垣間見える。

二、身近で長時間観察した日記は、物事の理解の助けとなる。蒋介石は日記を書くこと55年の長きに及び、その日記を読むと、毅然として非妥協的な個性が紙上にありありと浮かぶ。沈錡や雷震の日記と対照すると、呉国楨事件、王世杰事件、孫立人事件から雷震事件にいたるまで、蔣が「自ら要件を処理し」、「外部からの介入に頼る」ことを嫌い、アメリカの干渉を受けいれず、胡適らのようなりべラル派の手まね足まねをしていると見なされることも潔しとしないといったように、蔣の強情な個性がよくわかる。日記と檔案を合わせて考察することで、多くの方が、蔣の政治の特徴が、文物を重んじ、自ら命令することを好み、党性党徳に注意し、敵を師とみなし、宗教信仰を贖罪の道と見なす点にあったことを指摘している。これらのことは、その日記を読むと非常によく理解できる。『胡宗南日記』の中で蔣は「軍事に真面目で、政治にいい加減」（1942年3月）とされているのは、感じるものがあって書いたのだろう。『陳誠日記』に「ゴミは委員長から見えない場所に捨てる」（1944年2月18日）とあるのは、役所の責任逃れ、引き延ばしといった悪習に対する批判と風刺である。中国人の陋習は、蔣も知っており、しばしば何とかしようとしたが、どうしようもなかった。

三、よい日記といったときに、最もよいのは記述の時間が長いもので、内容が巨細漏らさず、禁忌とすることがなく、思うがままに書き、とりわけ感覚が鋭く、内情を察することができ、肝心な点について述べているものが最上である。日記に完全を求めても得られない状況で、「象をなでる」のそしりを免れるには、使用者は一部を以って全体を推測してはならず、全体を以って一部と見なしてもならない。豊富な歴史の知識があって、はじめて内外に通じ、全貌を把握することができるとも言える。

近年日記が大量に出版されていることは、もちろん研究者にとって喜ばしいことだが、日記の使用に際してはなお、作者の書き方、習慣、目的に留意しなければならない。自分のために書いた日記の多くは一面的な主観に失し、他人のために書いた日記は往々にして晦渋な点が多い。それ以下なのは、うその日記で、もちろん研究史料として利用すべきではない。子女や夫人が日記の暗殺者となった時には、史家は慙愧の声を上げることしかできない。日記は史学研究の一次史料だが、檔案や他人の記述を利用して比較と照合を行って、歴史の真相を求め、単一史料の弊に陥ることを免れなければならない。

## 第1セッション 「戦後東アジアの国際関係と檔案（アーカイブ）」

### 日中平和友好条約と福田外交

井上 正也（成蹊大学准教授）

本報告の目的は、1978年8月に締結された日中平和友好条約（以下、日中条約）の締結交渉を新史料に基づき検証することにある。日中条約については、先行研究は反覇権条項（第三国条項）をめぐる日中両国の交渉過程に関心が集中していた。また反覇権条項に強硬姿勢を示していた中国側が一変して日中条約の締結に向かった理由として、1977年7月の鄧小平復活と翌月の文化大革命の終結という中国の国内政治要因が指摘されてきた。しかし、これに対して当時の福田赳夫政権が、他の外交交渉や国内政局を勘案しながら、日中条約交渉にどのような見通しを持っていたかについては、史料的制約もあり十分に論じられてこなかった。中国側が姿勢を転換させた後、なぜ日中条約が締結されるまで1年以上の期間を要したのかについて先行研究は明確な答えを与えていないのである。

